

令和元年6月6日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02416

研究課題名(和文) ハンス・ドリーシュ「新気論」の研究 「エンテレヒー」の行方

研究課題名(英文) Neo-Vitalism of Hans Driesch

研究代表者

福元 圭太 (FUKUMOTO, Keita)

九州大学・言語文化研究院・教授

研究者番号：30218953

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：生命現象には物理・化学的に還元できず、因果論的な法則にも従わない「エンテレヒー」という因子が作用していると主張した異端の生物学者、ハンス・ドリーシュの生命観ならびに哲学の研究。「エンテレヒー」はドリーシュによれば、空間外から作用する物質でもエネルギーでもない因子で、生命はその作用のもとで目的論的に発生するとした。ドリーシュのこの考えかたは「新気論」と呼ばれ、今では「迷妄」として否定的に評価されているが、機械論的な自然科学に対抗する有機的自然哲学として再評価の動きもある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ドリーシュに関する研究成果は、申請者が主として科学研究費の補助を受けて12年前から取り組んできた、ドイツにおけるネオ・ロマン主義的自然哲学の系譜に関する研究の第3部に当たる。グスタフ・フェヒナーの精神物理学的な汎神論的万物賦霊論、エルンスト・ヘッケルの一元論的自然宗教に続き、一時期ヘッケルに師事したドリーシュの新気論を取り上げることによって、機械論的な自然科学が万能視される近現代においても隠れた水脈として、有機的でホーリスティックな生命の全体性を志向するロマン主義的な自然哲学が伏流していることを示した。

研究成果の概要(英文)：It is a study of the "heterodox" biologist, Hans Driesch's view of life and his philosophy. He insists that the phenomenon of life can not be reduced physically and chemically, and does not follow causal laws, but the factor "Entelechie" is acting in the phenomenon of life. According to Driesch, "Entelechie" is a factor that is neither a substance nor energy. It acts from outside the space and life is generated teleologically under that action. Although this idea of Driesch, called "neo-vitalism", is now negatively evaluated as "delusion", there is also a movement of re-evaluation as an organic natural philosophy that opposes mechanical natural science.

研究分野：ドイツ文学・思想

キーワード：ハンス・ドリーシュ 新気論 ネオ・ロマン主義 オカルト

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究の動向と位置づけ

研究開始当初、本邦におけるドリーシュ研究は、知る限りにおいて、科学史・生命倫理を専門とする米本昌平（総合研究大学院大学教授）によるものに尽きると言ってよかった。米本は京都大学在学中、生物学を専攻していたが、当時の学会でドリーシュの「新生氣論」はまさに「撲滅すべき迷妄の典型」であったと回顧している。米本の場合 1970 年ごろにドリーシュを知るのであるが、その後 30 年以上ドリーシュの紹介をためらっていたようである（『独学の時代』NTT 出版、2002 年；『生氣論の歴史と理論』書籍工房早山、2006 年）。生命は完全に物理・化学的に還元可能と見る分子生物学者で、DNA 二重らせん構造の解明者の一人であるフランシス・クリックがドリーシュの生氣論を徹底的に批判していることから分かるように、現在なお機械論的生命観が支配的な状況下、「新生氣論者」ドリーシュを取り上げることに、理系の科学者はためらいがないわけではないらしい。なお米本の研究は基本的に、英訳されたドリーシュの幾つかの著作に基づいており、ドイツ語原典に広く当たったわけではない。

ドイツにおけるドリーシュ研究も、その数は極めて少ない。「エンテレヒー」といった因子は、かつて「エーテル」が辿った運命と同様、すでに乗り越えられ、不要とされたのである。唯一注目すべきは、マクデブルクの在野の哲学者 Thomas Miller によるモノグラフィーである（*Konstruktion und Begründung: zur Struktur und Relevanz der Philosophie Hans Drieschs.* Olms Verlag, Hildesheim 1991）。

本研究は米本の先駆的な研究を基盤としながら、米本が十分に検討し得なかったドイツ語原典に当たり、ドリーシュ像を浮き彫りにしようとした。その際、米本の科学的な記述から重点をより文化史的なもの、つまりドリーシュの哲学と思想にシフトし、Miller の研究を参照しながら、本邦に初めてドリーシュの「新生氣論」を本格的に紹介するとともに、意外な場所に潜むその後世への影響の射程を測定しようとするものであった。

着想に至った経緯

申請者はこれまでに得た科研費により、「ドイツ青年運動における非合理主義」、「ヘッケルの生物学的一元論と自然神学」、「マッハの要素一元論と自我の崩壊」、「フェヒナーの精神物理学とその神秘主義的傾向」、「フェヒナーにおける無意識と夢 深層心理学への影響」といった内容の研究を遂行してきた。これらの研究は「実証主義的自然科学が席捲する時代に伏流する神秘主義的自然哲学の水脈を探る試み」、あるいは「科学とエゾテリウムの独特な救済論的混交の分析」と約言することができる。それは即ち、20 世紀初頭の非合理主義、生および自然の崇拜、スピノザ的「神即自然」の系譜を、ヘッケル、マッハ経由でフェヒナーという淵源にまで遡る試みであった。本研究の対象となるドリーシュもまた、フェヒナー、ヘッケルら実証的自然科学の徒でありながら同時にロマン主義的自然哲学を奉じるユニークな思想家の系譜に連なる。事実ドリーシュはイェナ大学のヘッケルのもとで学位を得たのち、ヘッケルから離反していくのである。

ドリーシュ研究はすなわち、申請者が 2001 年から開始したヘッケル研究、2008 年のマッハ研究、2009 年以降のフェヒナー研究を補完するものであり、実証主義的・機械論的な表層からは見えないネオ神秘主義的な生氣論の水脈を辿りつつ、その思想的位値を定位しようとするものである。

なお、「エンテレヒー」発想の契機は、ドリーシュ自身が 1891 年に行った「ウニの受精卵の胚分割実験」にあった。それまでのいわゆる「ヴァイスマン学説」（動物学者 August Weismann にちなむ）では、二細胞期の片方の胚からは、ウニの半分の体しか発生しないはずである。しかしドリーシュが分割した二つの胚からは、小型ではあるが二体の完全なウニの幼生ができたのである（ドリーシュはそれゆえ、「クローン研究の始祖」と目されている）。今日の iPS 細胞や、その存在が否定された STAP 細胞といったいわゆる「万能細胞」は、米本の言うようにドリーシュの言う「エンテレヒー」を「情報」と解釈すれば、卵細胞以外にも「エンテレヒーが実在する例」と言えるのかもしれない。「万能細胞」に関する報道や知見もまた、申請者がドリーシュ研究を開始する刺激となった。

2. 研究の目的

(1) ドリーシュの哲学的著作の分析

ドリーシュの主要な著作、なかんずく『歴史と学説としての生氣論』（1905；英語からの米本訳あり）、『有機体の哲学』（特に補増第 2 版；1921）、『自然の形而上学』（1924）、『超心理学』（1932）等、ならびにいくつかの重要な雑誌論文（『機械と有機体』1935 等）を分析し、ドリ

ーシュの思想の枢要を浮き彫りにする。

(2) ドリーシュの「新生気論」の影響を以下の3点に関して跡付ける

生氣を吹き込まれた無機物 グスタフ・マイリンクの『ゴーレム』を中心に

グスタフ・マイリンクの代表作『ゴーレム』(1915)は、33年ごとにプラハの町に現れる怪人「ゴーレム」にまつわる怪奇と幻想の物語である。『フランケンシュタイン』(1818)と並び称される『ゴーレム』を、「生氣を吹き込まれた無機物」すなわち怪物や自動人形を、ドリーシュの「新生気論」との関連で分析する。

ユンガー兄弟(エルンスト・ユンガーとフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー)

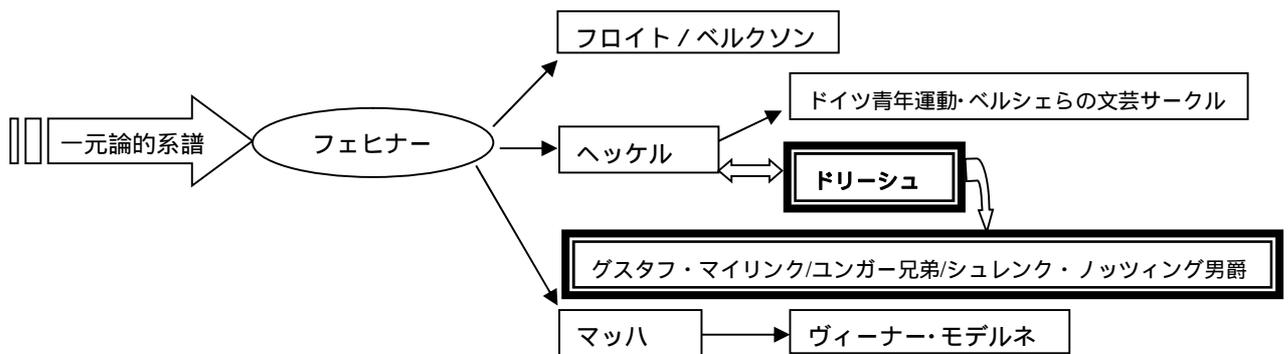
機械論によって抑圧された生氣論は、やがて復讐を遂げる。機械そのものが生氣あるもの、魂を賦活されたものとして立ち現れるのである。機械と鉄、砲弾と火薬があたかも生命をもった怪物のように描かれる『鋼鉄の嵐の中で』(In Stahlgewittern. 1920)を書いたのは、ドリーシュのもと、ライプツィヒ大学で哲学を学んだエルンスト・ユンガーであった。さらに弟のフリードリヒ・ゲオルク・ユンガーも、その先駆的なエコロジ-的観点ゆえに現在注目を集めている著作『技術の完成』(Die Perfektion der Technik. 1939)において、巨大化し全面化する技術の支配を、生氣が吹き込まれた「巨人」による支配とみなしていると予想できる。本研究ではユンガー兄弟におけるドリーシュ「新生気論」の消息を追う。

シュレンク・ノッツィング男爵と交霊術 ミュンヘンのオカルティズム

「生氣論」が生命エネルギーの物象化、つまりは霊や魂の顕現といったオカルト的なものと親和性があることは言を俟たない。事実ドリーシュは、ミュンヘンの医師で降霊会の主催者でもあったシュレンク・ノッツィング男爵のサロンに出入りしていた。(1)に挙げたグスタフ・マイリンクやトマス・マンもまた、ドリーシュと共に降霊会に参加している。ノッツィング男爵とドリーシュの関係に注目し、「新生気論」のオカルト的側面に照明を当てる。

3. 研究の方法

上の「着想に至った経緯」に記した申請者の2001年以降の研究をフローチャートにまとめた。本申請に係る研究は、二重線で囲った「ハンス・ドリーシュ研究、およびその影響」の部分に相当する。一重線で囲った課題は、科研費の補助を得て、これまでに取り組んできた課題である。



(1) ドリーシュの哲学的著作の分析

ドリーシュの主要な著作(『歴史と学説としての生氣論』1905; 英語からの米本訳あり、『有機体の哲学』特に補増第2版1921、『自然の形而上学』1924、『超心理学』1932等、ならびにいくつかの重要な雑誌論文(『機械と有機体』1935等))を分析し、ドリーシュの思想の枢要を浮き彫りにする。

また、マクデブルクの在野の哲学者・文筆家である Thomas Miller 氏を訪問し、会見して研究に関するアドバイスを受けるとともに、その著書 *Konstruktion und Begründung: zur Struktur und Relevanz der Philosophie Hans Drieschs*. Olms Verlag, Hildesheim 1991 における不明な点、疑問点について協議する。さらに Miller 氏が使用した文献中、日本では入手困難なものについては、できれば複写をいただき、さらにマクデブルク大学等の図書館で文献の調査・収集を行う。なお Miller 氏とはすでにコンタクトを取っており、本申請にかかる訪問と会見についても快諾を得ている。

ドリーシュに関しては、その著作のみならず、伝記的な経緯も非常に興味深いので、この点にも焦点を当てる。

(2) ドリーシュの「新生気論」の影響を以下の3点に関して跡付ける

生気を吹き込まれた無機物 グスタフ・マイリンクの『ゴーレム』を中心に

『フランケンシュタイン』(1818)と並び称される『ゴーレム』を中心に、「生気を吹き込まれた無機物」、すなわち怪物や自動人形をドリーシュの「新生気論」との関連で分析する。

ユンガー兄弟(エルンスト・ユンガーとフリードリヒ・ゲオルク・ユンガー)

ユンガー兄弟におけるドリーシュ「新生気論」の消息を追う。機械そのものが生氣あるもの、魂を賦活されたものとして立ち現れるメタファー、いわば「機械論によって抑圧された生氣論の復讐」は、非常に今日的なテーマである。フリードリヒ・ゲオルク・ユンガーが先駆的なエコロジー的観点から描いた『技術の完成』(*Die Perfektion der Technik*, 1939)は、巨大化し全面化する技術の支配がテーマとなっている。フリードリヒの兄エルンスト・ユンガーにおいても、機械と鉄、砲弾と火薬があたかも生命をもった怪物のように描かれる(『鋼鉄の嵐の中で』(*In Stahlgewittern*, 1920))。特にエルンスト・ユンガーがドリーシュのもと、ライプツィヒ大学で哲学を学んだという事実は興味深い。

シュレンク・ノッツィング男爵と交霊術 ミュンヘンのオカルティズム

ノッツィング男爵とドリーシュの関係に注目し、「新生気論」のオカルト的側面に照明を当てる。ミュンヘンの医師で降霊会の主催者でもあったシュレンク・ノッツィング男爵とドリーシュの間には、個人的な繋がりがあり、ドリーシュはノッツィング男爵のサロンに出入りしていた。「新生気論」が生命エネルギーの物象化、つまりは霊や魂の顕現といったオカルト的なものと親和性があることは言を俟たない。その成果をまとめたのが、今日ではもっぱらオカルティズムに分類されるような事項を論じた1932年の『超心理学』である。(1)に挙げたグスタフ・マイリンクやトーマス・マンも参加したノッツィング男爵の降霊会とドリーシュの「新生気論」の関係を探る。

4. 研究成果

生命現象には物理・化学的に還元できず、因果論的な法則にも従わない「エンテレヒー」という因子が作用していると主張した異端の生物学者、ハンス・ドリーシュの生命観ならびに哲学をドイツ語のオリジナル文献に基づき本邦に紹介することができた。「エンテレヒー」はドリーシュによれば、空間外から作用する物質でもエネルギーでもない因子で、生命はその作用のもとで目的論的に発生するとされる。ドリーシュのこの考えかたは「新生気論」と呼ばれ、今では「迷妄」として否定的に評価されているが、機械論的な自然科学に対抗する有機的自然哲学として再評価の動きもある。本研究はドリーシュの新生気論を「実証主義的自然科学が席捲する時代に伏流する神秘主義的自然哲学の水脈」を補強し、「科学とエゾテリウムの独特な救済論的混交」を示す事例と位置づけた。それは即ちドリーシュを、フェヒナー、ヘッケルら実証的自然科学の徒でありながら同時にロマン主義的自然哲学を奉じるユニークな思想家の系譜に置いたということである。

しかし研究の経緯で、マイリンクの『ゴーレム』に関しては、ユダヤ神秘主義の強い影響下にあるため、新生気論からの直接的な影響を跡づけることに無理があることが判明した。またユンガー兄弟、特に弟のフリードリヒ・ゲオルクの機械論『技術の完成』については、友人のサークルによる邦訳が公刊されたが、ドリーシュとの思想的な懸隔は当初予想したよりは大きく、具体的な影響関係を論じることができなかった。ただしシュレンク・ノッツィング男爵のオカルト論とドリーシュの『超心理学』については、十全に考察し、影響関係をトレースすることができた。

今後も「実証主義的自然科学が席捲する時代に伏流する神秘主義的自然哲学の水脈」を辿ることは意義があると考え、ヘッケルの流れをくむリヒャルト・ゼーモン「ムネーメ」(物質に宿る記憶)についての科研申請をしたが、テーマの意義や重要性に審査員から疑問符が付き、申請が認められなかったため、研究の今後の展望を再考している途上にある。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計6件)

福元圭太:「ライプツィヒのフェヒネル グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜(9)」『かいるす』(かいるすの会)56号, pp. 31-51, 2018.11. (査読有り)

https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&mode=MD100000&bibid=2004796&opkey=B155720473964783&start=41&listnum=41&place=&totalnum=53&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=40&heck=00000000000000

福元 圭太 : 「フェヒナーからフロイトへ (3) グスタフ・テオドール・フェヒナーの系譜 (8) 」 『かいろす』 (かいろすの会) 56 号 , pp. 18-30, 2018.11. (査読有り)
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=2004795&opkey=B155720473964783&start=41&listnum=40&place=&totalnum=53&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=40&check=000000000000000000

福元 圭太 : 「ハンス・ドリーシュと超心理学 「エンテレヒー」の行方 (2) 」 『言語文化論究』 (九州大学言語文化研究院) 39 号 , pp. 1-19, 2017.09. (査読有り)
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=1832793&opkey=B155720473964783&start=21&listnum=31&place=&totalnum=53&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=20&check=000000000000000000000000

福元 圭太 : 「Das Organische und das Unorganische bei *Doktor Faustus* Das III. Kapitel als Paradigma des gesamten Romans 」 In: *Neue Beiträge zur Germanistik* (日本独文学会) , Band 15, Heft 1, 153, pp. 112-129, 2016.12. (査読有り)

福元 圭太 : 「ハンス・ドリーシュ試論 「エンテレヒー」の行方 (1) 」 『言語文化論究』 (九州大学言語文化研究院) 36 号 , pp. 1-14, 2016.03. (査読有り)
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=1655038&opkey=B155720473964783&start=21&listnum=30&place=&totalnum=53&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=20&check=000000000000000000000000

福元 圭太 : 「Die Offenbarung des Geheimnisses Die "Inflationspropheten" oder die Inflation der Propheten 」 『言語文化論究』 (九州大学言語文化研究院) 35 号 , pp. 15-26, 2015.11. (査読有り)
https://catalog.lib.kyushu-u.ac.jp/opac_detail_md/?reqCode=fromlist&lang=0&amode=MD100000&bibid=1546581&opkey=B155720473964783&start=21&listnum=27&place=&totalnum=53&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=20&check=000000000000000000000000

〔学会発表〕(計 0 件)

〔図書〕(計 0 件)

6 . 研究組織

- (1) 研究分担者 なし
- (2) 研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。